



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 185

2012(平成24)年 3月23日(金)発行

飯

＜旧満州国の「引き揚げ船」はすべてアメリカの軍艦LST(戦車揚陸艦)で行われました＞

■1945年8月15日、日本が敗戦した時海外にいた日本人は約660万人。しかし日本政府は敗戦の前日、すべて海外にいた日本人を「現地に定着」という無責任な方針を発表。■旧満州国にいた日本人は155万人で、敗戦でいち早く関東軍幹部は逃亡し、日本国に見捨てられ取り残された居留民は日本に帰国するため、命がけの逃避行を強いられます。日本には船はなく、満州からの引き揚げはすべてアメリカのLST(戦車揚陸艦)などで行われ、1946年5月7日から48年8月まで満州から約105万人が帰国でき、24万人が死去。

国や軍に捨てられた入植者 満州人やソ連軍の襲撃の恐ろしさ



▲引き揚げの姿を木村栄子さん自身が描いた絵。お父さんは召集され、左からお母さんのマツイさん32歳、中央が栄子さん11歳で背中に3歳の妹三子さんを背負って逃げた。右が5歳の妹美美子さん。

た。助かりました。銃を持って四人が村田長さんと高等科の人らで、母はおにぎりをいっぱい作りました。子供や老人の死体があちこちに捨てられていたことが多くありました。親とはぐれる子供、病気の人、怪我人も沢山いました。

(裏面につづく)

＜その①の内容＞
私達家族は、昭和十三年宮城開拓団として満州国に入植した。現地の満人とそれなりに心を通じて生活していたが、終戦一ヶ月前に父は召集され、終戦直前の八月十日にはソ連軍が攻め込んで来て、恐怖の中で逃げました。
満州人に襲撃されそうになるが翌日の八月十一日、満人部落に着いた。陸子の足は傷だらけで真っ黒になっていた。飲まず食わずで一昼夜逃げ

回り、何里歩いたのだろう。満人に鍋を借りてご飯を炊き、生味噌で食べました。その夜は四人で抱き合って寝ました。
八月十二日早朝、「皆んな起きろ、襲撃だ、逃げろ」と班長さんが叫んだ。母は美美子の手を引いて「母ちゃんの手を放すな」と言っていた。十一歳の私は三歳の妹の陸子をおんぶして頭から二人で風呂敷をかぶった。
外に出ると、満人四、五十人が鉤や天秤棒や石など持って口々に「リビリ

八月十三日福龍駅にたどり着くが列車は止まらず通過するだけ

ソ連の戦車が日本人を轢き殺す
野宿して草の根や、ミミズを食べたり
夜は狼に怯え、流れ弾が飛んでくる満州の広野や湿地を無我夢中で逃げ回りました。私達はコウリヤン畑に逃げました。が、逃げ遅れた日本人の女、子供、老人を、ソ連の戦車が轢き殺して行きました。私達は恐怖のあまり、腰を抜かして立っていることが出来ませんでした。
野宿の時は、火は使えないので、草の根、ミミズ、生米、生コウリヤンなど何でも食べ、生味噌をなめ、川の水を飲んで夜を明かしました。四方八方敵ばかり、いつ殺されるのか、恐怖で歩くのが精一杯でした。

○これは相馬市磯部の木村栄子さんが、67年前の満州国や引き揚げの体験を原稿用紙70枚に克明に書かれた記録を、3号にまとめたものです。○原稿とともに、木村さんは貴重な家族の写真、中国の当時の地図、当時の紙幣、父忠志さんのソ連捕虜収容所の記録、引き揚げの事実証明書、それに長春で定期預金を騙し取られた二セ証券預かり証などもしっかり大切に保管されていました。○事務局がそれらを昨年1月の「漫画展」でお預かりしましたが、木村さんも私たち事務局も大震災で避難してお互いに連絡がとれず、1年越しの編集・掲載となってしまいました。



＜私の満州体験＞その②
ソ連軍の侵入
地獄の逃避行
相馬市磯部 木村栄子

男は殺され、女性は無蓋車に拉致も

八月十四日、福島・山形開拓団の人達が、一日遅れで着きました。満人に銃や持ち物を略奪され、男子は殺され、女性は強姦され、若い女性は拉致されたそうです。怪我した人や血だらけになって日の丸の旗を肩にかけている人、日の丸の旗を振つてふらふらになりながら福龍駅に着いた人もいました。

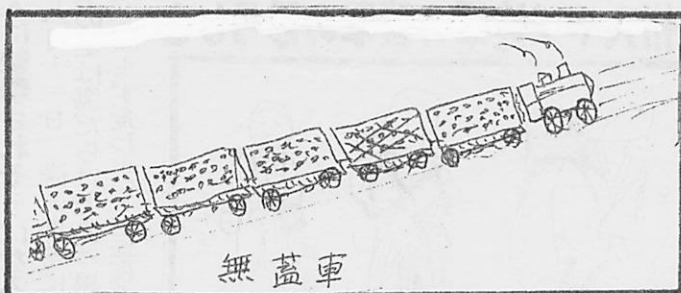
私達は一日早く逃れてきたので、そこまで悲惨な目に会わないで済みました。

「幼児は青酸カリで殺す」と

私達はまだホームにいましたが、米は二升位になり、味噌はかびてしまったので捨て、塩だけにしました。松村医師が宮城開拓員を集めて「これから先は、山を越え川を渡ってハルピンまで歩く。五歳以下の子供は無理だから、青酸カリを注射して殺す」と言った。私の二人の妹も対象になります。母親達は勿論、猛反対し、行ける所まで行つてそれで駄目なら親の手で殺して自分達も自害する、ということになりました。

「最後の上り列車だ。乗りなさい」

午後四時頃、ホームに貨物列車が停車した。日本人の満鉄駅員が「この貨物列車が最後の上り列車だから乗りなさい」と言う。荷物の上に綱が張つてある無蓋車（むがいしゃ）で、屋根のない貨車（むがいしゃ）でした。急いで乗りました。「綱にしっかりとつかまっていろ」と母は泣き声で叫んでいた。ホームには捨てられた子供や老人、病人、歩けない人、怪我人、赤ちゃんが何人も置き去りにされました。



▲木村さんが描いた絵ですが、福龍駅から葫蘆島(コロウ)まで乗った汽車は、屋根のない「無蓋車(むがいしゃ)」で、トイレもなく、雨風をしのぐこともできない貨車でした。

目の前で満人との殺し合いが

山岳地帯に入る一歩手前で列車が止まりました。線路に石や材木を置いてあり、満人が襲撃しようとしたのです。大人達が障害物を取り払つて、満人五、六十人は石や天秤棒や鉄で反撃に出た。二人の兵隊さんは殴り殺されました。部隊からはぐれ、若く階級の低い二人の日本の兵隊さんが私達を助けて犠牲になったのです。名前も出身地も分かりませんでした。列車は発車し、夜になり雨が降ってきました。綱とシートをはいでみたら電球が入った木箱がありました。私はそこにもぐつて眠りました。

八月十五日、終戦の日のこと

八月十五日午前一時頃、南岔(ナンサア)駅に着きました。列車から降りると、雨は降るし流れ弾は飛んでくるし、班長さんが「このタイマツに続け」と大声を出しますが、私達女、子供、老人は何十本もの線路を渡ることが出来ませんでした。進むのを断念し引き返しました。南岔駅は日本の材木会社が材木を運搬するために線路を何十本も作ったのです。

貨車に轢かれて何人も死んだ

私達は雨を避けて弾よけのため、乗ってきた列車の下にもぐりこみ、皆んなで線路に腰をおろしました。私達家族は雨もりのするのので皆んなから離れて、枕木に腰掛けました。

すると突然、機関車を外すために車輪が一回転した。母は大声で伏せろと叫んだ。芙美子と陸子は伏せたそうですが、私は逃げようとして線路に手をかけ、後一センチの所で車輪が止まりました。満鉄の線路は三十センチ幅が広いことを母は知っていて、伏せていると助かるということでした。線路に腰をかけた人達は、将棋倒しになり、たくさんの人が亡くなり、私達は地獄を見ました。雨が降っていた中から「助けて、助けて」「人殺し、痛い、痛い」といういろいろな声が聞こえました。松村医師を捜しましたが、いませんでした。別の軍医が来て応急手当をしてくれました。

兵隊さんが来て、貨車の下から死体を出してくれ、母と渡辺きつよさんと二人は、担架で南岔(ナンサア)駅の土手に死んだ人達を埋葬した。

やがて母は飯盒でご飯を炊き、塩で食べました。危機一髪で命が助かりましたが、弟の雄志ちゃんも位牌に向かい、家族を守ってくれて有難うと拝みました。

私達は国 関東軍に見捨てられた

私たちはこんな地獄を見ながらの逃避行を続けているのに、責任者の開拓団団長の長岡亀三郎はもう一年前に内地に帰っているし、開拓団本部の幹部や校長や先生方の姿は見えないかつた。結局私達は国、関東軍、宮城村に見捨てられたのです。

日本兵はソ連の捕虜として北へ向かう

一方私たちの列車の方向とは反対に、兵隊さん達を乗せた無蓋車は北のソ連の方に向かって行きました。その時私達はまだ、敗戦を知らなかったのですが、兵隊さん達は敗戦を知っていたのか、ソ連の捕虜になる運命を悟っていたようで、皆んな下を向いて泣いていました。

地獄のようなことが次々と

八月十六日の朝、十五歳から二十歳の青少年義勇軍の若者達が無蓋車でバツクして来ました。怪我をして血だらけになっている少年、息絶えている人、うわごとを言う少年もいた。八路軍と満人に、山から材木や石を落とされ襲撃されたのです。

疲労と恐怖、空腹、精神的にもまいっていた母親、おんぶしたまま赤ちゃんを窒息させる親、子供を捨てる人、満人に子供と食べ物と交換する人、死んだ赤ちゃんをいつまでもおんぶしている母親もいました。五歳の孤児が、一家の全財産の現金と預金通帳を風呂敷に包み背負って、私達についてきて、とても可愛そうでした。十六日の夕方、綏化(すいか)駅に着き、開拓民はそこで降ろされ、義勇軍もソ連の捕虜となる運命で、列車は北に走って行きました。(その②終わり・次号へ)